

ORANGE

Vol.35



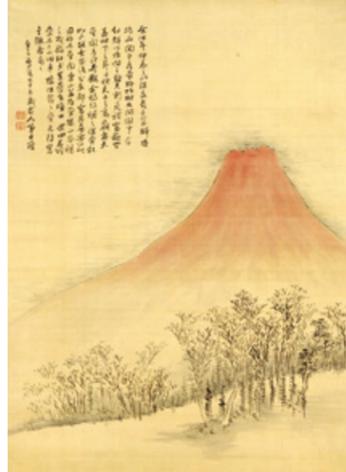
中西利雄《紅葉》1938(昭和13)年

田辺市立美術館蔵

作品介绍 中西利雄《紅葉》

水彩画を専門とした中西利雄（1900～1948）は、1928（昭和3）年から1931（昭和6）年にかけてのフランス留学を経て、不透明水彩絵具を用いた近代的な表現を日本の水彩画の世界に切り拓いていった。それは人物像において最も個性的な成果を成したが、風景画についても積極的に取り組まれている。海水浴場や競馬場といった、モチーフそのものが新鮮で、都会的な作品ばかりでなく、1938（昭和13）年の第3回新制作派協会展で発表された本作の様に、山間の紅葉という日本絵画の古典的な主題を扱っても、従来の淡く潤った水彩画の表現とは一線を画す内容で完成させている。中西の獲得したモダンな作風が、日本美術の装飾的な感覚の中で活かされた作例の一つで、水彩画の域を超えて日本近代の絵画表現をうかがう上でも貴重な作品といえよう。

（学芸員 三谷 渉）



野呂介石《紅玉芙蓉峰図》 1821(文政4)年
（公財）脇村奨学会蔵 [田辺市立美術館寄託]

本作では細い墨の描線と濁いた淡墨で山の輪郭や林を表現するのみにとどめ、代赭の紅とのコントラストによって、*寒林に赤く染まる富士、をより際立たせる効果を上げています。介石は晩年に至るまで多くの富士図を遺しましたが、この情景がよほど脳裏に深く焼きついていたのか、江戸出向の20年後、その経緯を賛に記した本作の制作に至りました。

介石は日本で最も古い「赤富士」を描いた画家と言われています。本作品はわが国で最も知られる、葛飾北斎の浮世絵版画「赤富士」（『富嶽三十六景』より《凱風快晴》）とは趣を異にする、文人画家・野呂介石による「真景山水の赤富士」です。

（主任 辰巳 充）

絵画と出会う「この一点!」

きのくのにの三画人 Ⅲ.野呂介石

会場：田辺市立美術館
会期：2021年12月25日（土）～2022年2月6日（日）

本作品は野呂介石が公務で江戸に向かう際に見た「赤富士」を、後年回想して描いたものです。介石は寛政11(1799)年6月と享和元(1801)年2月の2回、江戸へ向かったことが確認されており、その途中、各所で見た富士山の姿に感銘を受け、様々な情景の富士図を描いています。

この「赤富士」を見たのは、上部に書かれている賛から享和元年の時と考えられています。賛には「私はこの時初めて*寒林の朝もやの中、陽の光に赤く染まる富士。を見てとても感動した。しかし、今までそのような現象を見たことがなかったので、この感動をうまく表現することが出来なかった。そこで、江戸に着いてから友人である柴野栗山や菅茶山【注：どちらも当時の著名な儒学者・文人】にこの景色のことを尋ねたところ、彼らはこの現象を既に知っており、ある人はこれを*紅玉芙蓉。と名づけていた」と記されています（要約）。

介石はこの作品を描いた5年前にも、「赤富士」を見たときの感動を表した画を作成しています。その作品では夜明け前の薄暗い景色の中に赤く浮かぶ富士の情景を、墨の濃淡も駆使して忠実に表現しようとしています。

田辺市立美術館へのきもち②

田辺市立美術館が平成8（1996）年11月に開館して、ちょうど今年が25周年ということを知った。少ない学芸員の数ながら、紀南地方の核となるミュージアムとして、展覧会や教育普及事業など、継続的に充実した活動をされてきたことに、あらためて敬意を表したい。

実は、今年はさまざまな記念の年が重なっている。私が勤務する和歌山県立博物館は、昭和46（1971）年4月に開館しており、創立50周年の年にあたる。和歌山県立紀伊風土記の丘も、同じ年の8月に開館しているので、同じく創立50周年である。さらに、県内で最も歴史の古いミュージアムである高野山霊宝館は、大正10（1921）年5月に開館しており、創立100周年を迎えている。ちなみに、廃藩置県により、現在の和歌山県の県域が最終的に確定したのは、今から150年前の明治4（1871）年11月である。

全国的に見て、文化財などの素材が多いにも関わらず、和歌山県内のミュージアムの数は多くはない。公立・私立を問わず、地域に散在するミュージアムが、規模は小さいながらも何とか踏ん張ってそれぞれの歴史を積み重ねているわけであり、田辺市立美術館も例外ではない。

田辺市立美術館は、紀州三大文人画家の優品を含む脇村氏のコレクションを基盤の一つとしているので、和歌山県立博物館の活動と重なる部分もあり、これまで収蔵資料の相互貸借など、密接な交流が続いてきている。近世紀州の文化を考える上で、とくに三大文人画家は欠くことのできない重要なテーマであり、今後ともに検討を深めていきたい。

ところで、『田辺市史』や『紀州郷土芸術家小伝』などの書籍をひもとくと、江戸時代、紀伊藩の附家老安藤家が支配していた田辺領、そしてその城下

には18世紀後半から学問や文芸で活躍する人びとが、さまざまな階層で散見される。画人としては、まず三栖組の真砂幽泉の名があげられるが、明治時代ごろにかけて、ほかにも現在ではほとんど無名の画人たちの活動がうかがわれる。作品の絶対数も少ないだろうし、技量的にも三大文人画家のレベルとは比べるべくもないが、こうした文化的基盤が近代的教育などと相まって、大正・昭和期の画家たちの台頭につながっていくのであろう。ほかにも、俳諧・和歌・漢詩・書などの分野も含め、この時期に田辺で活動した文人たちをさらに意識した方向性も、田辺市にある美術館の活動としてはあり得るのではないかと、丁度勤続30年を迎えた私の経験から思うところである。

（和歌山県立博物館主幹 竹中 康彦）



県立博物館エントランスにて玉石孔子像とともに

田辺市立美術館 NEWS ORANGE Vol.35

編集・発行：田辺市立美術館
発行年月日：令和3年10月1日

田辺市立美術館

〒646-0015 和歌山県田辺市たきない町24-43
TEL.0739-24-3770 FAX.0739-24-3771
http://www.city.tanabe.lg.jp/bijutsukan/

田辺市立美術館分館
熊野古道なかへち美術館

〒646-1402 和歌山県田辺市中辺路町近露891
TEL.0739-65-0390 FAX.0739-65-0393
http://www.city.tanabe.lg.jp/nakahechibijutsukan/

編集後記

今号もお読みいただきありがとうございます。10月からスタートする開館25周年記念の特別展「きのくのにの三画人」は、それぞれの文人画家の特色がよく分かるのではないかと、私も期待しています。「芸術の秋」、「学問の秋」にふさわしい開催になると思います。皆さまのご来館をお待ちしています。（F.O.）



祇園南海《五老峰図》

田辺市立美術館蔵

「開館25周年記念特別展 きのくのにの三画人」 スタンプラリー&クイズ

☆展覧会を見てスタンプを集めよう

受付でお渡しする台紙にスタンプを押してもらってください。各会期すべてのスタンプを集めた方には絵はがき4枚セットをプレゼント！

☆展覧会のクイズに参加しよう

図書コーナーにある台紙に出題しているクイズの回答をご記入いただき、応募BOXに投函してください。

正解した方の中から抽選で5名の方に当展覧会の図録を進呈します！

※会期ごとにクイズの内容は変わりますが、応募はどの会期のクイズでもOKです。

※抽選は2022年2月8日(火)に行い、当選者の発表は図録の発送をもってかえさせていただきます。

INFORMATION

開館25周年記念特別展
「紀の国わかやま文化祭2021」特別連携事業

きのくのにの三画人 脇村兄弟のコレクションとともに

I. 祇園南海

会場／田辺市立美術館
観覧料／600円
※学生及び18歳未満の方は無料
会期／2021年10月2日(土)～11月7日(日)
開館時間／午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
休館日／毎週月曜日・11月4日(木)

II. 桑山玉洲

会場／田辺市立美術館
観覧料／600円
※学生及び18歳未満の方は無料
会期／2021年11月13日(土)～12月19日(日)
開館時間／午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
休館日／毎週月曜日・11月24日(水)

III. 野呂介石

会場／田辺市立美術館
観覧料／600円
※学生及び18歳未満の方は無料
会期／2021年12月25日(土)～2022年2月6日(日)
開館時間／午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
休館日／毎週月曜日(ただし1月10日は開館)
12月28日(火)～1月4日(火)・1月11日(火)

森の神話

田辺市立美術館では、私たちの住むこの地を象徴するものの一つである「森」をテーマにした展覧会や講座を、主に熊野古道なかへち美術館（田辺市立美術館分館）を会場にして重ねてきました。熊野古道なかへち美術館の開館20周年の年であった2018（平成30）年には、図書館と共同で連続講座「森と芸術」を開催し、「文学」、「美術」、「音楽」の分野で「森」との関わりの深い作品を制作している芸術家を招いて話をうかがう機会を持ちました。それぞれの分野で注目される活動を展開している芸術家の制作と、その制作を通して考える森の魅力についての話は、改めて森がはらむイマジネーションの可能性を教えてくださいました。



土屋仁応《森》(部分) 2019年 個人蔵

そのときの講師の一人で、

木を素材に聖性を帯びた彫刻を制作し続けている土屋仁応（つちや・よしまさ／1977～ ）の芸術をお伝えする展覧会を、今年10月から11月にかけて熊野古道なかへち美術館で開催します。

土屋は東京藝術大学および同大学大学院で伝統的な木彫技術を学び、鹿や羊などの動物、あるいは麒麟やユニコーンといった幻獣をモチーフにした彫刻を発表してきました。それらの作品は国内外で

高い評価を得て、現代の日本を代表する彫刻家の一人となっています。古典的な仏像彫刻の技法の応用と独自の方法から生み出される土屋の生き物たちは、どれも静かなまなざしとたたずまいによって、無垢の存在を思わせるものとなっています。土屋の彫刻と接するとき、そこに神話の世界への窓口が開かれているような感覚を抱きます。

今回の展覧会についての協議を重ねる過程で、土屋は「森」ついて、人が意識している理性の世界に対する、無意識の世界が現れ出る場として捉えているということを知ることができました。二つの世界の境界を行き来するような作品を作りたいと言う土屋の意思は、熊野古道なかへち美術館の展示室を、異界の生き物たちが棲む神秘的な空間へと変貌させてくれるはずです。そこに生まれる新たな「森の神話」を皆様とともに体感したく思っています。

（学芸員 知野 季里穂）

INFORMATION

「紀の国わかやま文化祭2021」特別連携事業

土屋仁応 森の神話

会場／熊野古道なかへち美術館

観覧料／400円

※学生及び18歳未満の方は無料

会期／2021年10月2日(土)～11月28日(日)

開館時間／午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

休館日／毎週月曜日

11月4日(木)・11月24日(水)

開館25周年記念のコレクション展－2

今年度は、田辺市立美術館の開館25周年を記念した近現代美術のコレクション展を4部構成で行う計画にしています。すでに第Ⅰ部「洋画の表現」と第Ⅱ部「織の造形」は年度初の4月から6月にかけて開きました。続く第Ⅲ部「日本画の革新」と第Ⅳ部「水彩画の展開」は、年度末の2月から3月にかけて開催します。

第Ⅰ部では、明治期以降に本格的に流入してきた西洋絵画の手法を受容し、日本人画家自らの表現として描かれた「洋画」の世界をお伝えしました。第Ⅲ部は、それに対置するものとして再編された「日本画」について、旧来の表現を脱却させて同時代の芸術へと革新してきた画家たちの制作に注目して紹介します。

当館には、斬新な表現を取り入れて大正期の日本画の世界に旋風を起こした「国画創作協会」の活動を先導した画家たちと、戦後



大下藤次郎《秋の海(小豆島)》 1910(明治43)年頃

に新しい時代の日本画表現を追求して始動した「創造美術」の運動に参画した画家の優れた作品がコレクションされています。それらを通して近現代に切り開かれた日本画の世界をうかがいたいと思います。

第Ⅳ部では、開館当初から近代日本の絵画表現の特徴的な分野として注目し、収集に力を注いできた水彩画のコレクションを一堂に観覧します。絵具を水で溶いて描く水彩画は、従来の墨や紙などの扱いとの親和性から、早くに広く普及し、少なくない画家が高い技量を発揮して、新しい西洋の画材を自身の表現に用いた独特の魅力ある世界を繰り広げました。

明治期に盛んとなった透明水彩絵具による写生を基にした風景の表現、昭和期の不透明水彩絵具を用いた近代的な造形感覚によ

INFORMATION

開館25周年記念コレクション展

Ⅲ.日本画の革新

Ⅳ.水彩画の展開

会場／田辺市立美術館

観覧料／260円

※学生及び18歳未満の方は無料

会期／2022年2月19日(土)～3月27日(日)

開館時間／午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

休館日／毎週月曜日(ただし3月21日は開館)

2月24日(木)・3月22日(火)

きのくにの三画人



田辺市立美術館は今年、開館から25周年を迎えます。これを記念して、近世画壇で活躍した文人墨客の中でも特に、後世に「紀州の三大文人画家」として名を遺した、祇園南海(1676～1751)、桑山玉洲(1746～1799)、野呂介石(1747～1828)の画業を紹介する特別展を開催します。

第一部では、服部南郭(1683～1759)、彭城百川(1697～1752)、柳沢淇園(1703～1758)とともに日本文人画の先駆者として評価される祇園南海の詩書画を展覧します。南海は紀州藩医・順庵の長男として江戸に生まれ、14歳の時に京都の儒学者・木下順庵(1621～1699)に入門してその詩才を発揮し、22歳で儒学者として紀州藩に仕えました。一時期、不行跡を理由に城下を追われて謫居を命じられますが、後に赦され、来日した朝鮮通信使の応接で功績をあげたことから儒官として藩に復帰、紀州藩校が創設された時にはその校長ともなりました。生涯に亘って多くの文人墨客と交わりながら詩

桑山玉洲《雪山唵客図》 1798年(寛政10)年(公財)脇村珥学会蔵[田辺市立美術館寄託]

画の研究を続け、自らも秀でた才能を創作に発揮しています。

第二部では、画家・画論家として中国絵画に拠らない日本独自の絵画の創造を目指した桑山玉洲の表現に注目します。玉洲は紀州和歌浦で廻船業・両替商を営む昌澄の長男として生まれ、二十代の頃に江戸に赴いて著名な画家を訪ねて絵を学ぼうとしましたが、これに飽き足らず、以後ほぼ独学で書画の研究に励みました。様々な書画を収集、研究する一方、京都の著名な文人画家・池大雅(1723～1776)や大坂を代表する文人・木村兼葎堂(1736～1802)と交流して独自の絵画表現を確立するとともに、自著の文人画論を上梓して世に問い、画論家としても広く知られるようになりました。

第三部では、先人の書画を徹底的に研究しながら山水画の真髄を追求し、当時の紀州画壇に大きな影響を与えた野呂介石の画業を紹介します。介石は和歌山城下の町人・方紹の五男として生まれ、21歳の時、京都の池大雅に入門して画家としての基礎を学びました。後に京都や大坂を行き来し、そこで出会った木村兼葎堂に大きな影響を受けます。47歳の時に紀州藩士として出仕、以後

追悼：日本画家 稗田一穂

稗田一穂さんに初めてお会いしたのは、1997（平成9）年に開催した特別展の際にご来館いただいた折だった。そのときは展覧会の担当者でもなく、当館の一学芸員としてご挨拶したままでしたが、その後、近現代の日本画についても仕事を担うようになり、手紙や電話のやりとりを重ね、ときにご自宅を訪問してお話をうかがうようになった。

2005（平成17）年に、収蔵している稗田さんの作品の特集展示を行った頃から、いくらかの信頼をいただけるようになったろうか、私的な事柄も話題にあがることがあった。ある日いただいた電話で、当地の

1997(平成9)年8月「稗田一穂展」の初日に行われた公開対談の折の稗田一穂さん。今年3月23日に逝去。

藩の仕事を続けながら多くの文人墨客たちと交流し、熊野地方をはじめとする各地を旅して山水画を精力的に描くとともに、多くの弟子たちにその画風を教え伝えました。

本展覧会で取り上げる紀州の文人画は、田辺市出身の慧眼の美術コレクター、脇村義太郎・禮次郎兄弟の収集品の要でもあったもので、両氏の旧蔵品は当館の収蔵品の核の一つとなっています。弟、禮次郎の文人画収集は、当時、中央公論美術出版の社長であった栗本和夫のコレクションを譲り受けたことがきっかけになったと言われていませ。その後、友人であり当時、岩波書店の社長でもあった小林勇の助言なども得ながら、池大雅や青木木米(1767～1833)をはじめとする京坂で名を馳せた作家から紀州や中京を舞台に活躍した作家に至るまで、当時の文人画壇をある程度網羅できるほどの多様なコレクションを形成していきました。一方、兄の義太郎が収集した文人画コレクションは、禮次郎の系統立った収集に対して、あくまでも紀州ゆかりの作家にこだわる中で秀逸な作品を手にしていったものです。

当館ではこれらの作品を軸にして、開館当初から折に触れて文人画をテーマとした展覧会を開催してきました。その中で南海、玉洲、介石それぞれの作家に注目することはありましたが、彼らを「きのくにの三画人」として一堂に紹介するのは本展覧会がはじめてとなります。開館25周年を機に、紀州が誇るこの三画人の業績を改めてお伝えしたいと思います。

（主任 辰巳 充）

ことについて話している途中、ご尊父の納骨に訪れた場所のことを「初めての景色のはずなのに、なぜかとても懐かしい感じがしてねえ」とおっしゃった後、受話器の向こうで声を詰まらせられたことがあった。そのとき以来、当地を故里として意識することが強くなったことをうかがった。

2007（平成19）年に「創画会60年展－創造美術からの流れ－」を開催し、以後「創造美術」を結成して戦後の日本画革新の先頭に立った画家一人ひとりの軌跡をたどる展覧会を企画するようになってからは、度々その運動の只中におられた、かつてのご自身のことや先輩の画家のことについてお聞きし、その都度貴重な証言をいただてきた。

2017（平成29）年の『吉岡堅二展』では、図録にご寄稿をいただくこともかない、後に送られてきたお便りに、「吉岡先生の図録毎日の時間を訪わず何度も拝見時刻を忘れています」と記されていたときは、たいへん嬉しく思うとともに、ある時代の同志の画家たちの関係の残り香にふれたような気がして、少なからぬ感慨があった。

今年の「高橋周桑展」についても、その計画をお伝えし、周桑についての記憶をお尋ねする手紙を出していたのだが、返ってきたのは、期待していたご返信ではなく、思いもかけない訃報だった。もうお話を聞くことはかなわなくなってしまったが、これまでにいただいたご厚情を胸に、稗田さんの生きた時代のことを、これからも深く探り、作品とともにしっかりと伝えてゆきたく思う。心よりご冥福をお祈りいたします。

（学芸員 三谷 渉）